

草木染めを用いた環境教育プログラムの改善と評価

秦絵梨花・福本菜美（環境学園専門学校）

【はじめに】

既存の研究によると、草木染めを用いた環境教育プログラムにおいて、参加者から「嫌なにおいがした」「濃く色がつかなかったため楽しくなかった」などの意見が報告されている(木村・君塚 2010)。本研究では「濃く染まらず楽しくなかった」との課題を改善し、野外で開催されるイベントで参加者が楽しめる草木染めの手法を考案した。また草木染めを通して植物に興味をもってもらえたかどうか、環境教育としての効果をアンケートにより検証した。その中で、入手の容易なタマネギの皮、ドングリ（アラカシ）、セイバンモロコシを染料として、糸を染め、ミサンガを編むという新たな企画を試みたので報告をする。

【方法】

2015年11月15日、元浜緑地（尼崎市）で開催された「公園で遊ぼう in 元浜緑地」にて草木染め体験ブースを出展した。参加された小学生32人に布かミサンガどちらかを選んで染めてもらいアンケートをとった。イベントでは次のような手順で行った。

1. 布かミサンガかを選ぶ
2. 染色液に20分つけた後、媒染液につける
3. 布は完成、ミサンガは編んでいく（三つ編みか横巻き結び。糸の長さは約40cm）

- ・所要時間 布：30分 ミサンガ：45～60分
- ・参加者：32人（男性7人・女性25人）、年齢：3～12歳

【結果】

アンケートの結果、すでに植物に興味をもっている人が多かったため、草木染めを通して植物に興味をもってもらえたかどうかの環境教育としての効果を検証することはできなかったものの、染めたものに関係なく32人全員に楽しんでもらうことができた。「草木染めをまたやりたいか」という質問に対しても29人が「またやりたい」と回答した。参加者の様子を観察すると、秋に多量に採取できるドングリは、色の変化が大きく好評であった。一方で、セイバンモロコシはきれいなレモン色に染まるものの、タマネギやドングリに比べると色が薄いため反応はよくなかった。また保護者も草木染めに興味を示され「どうして染まるのか」と質問をしたり子どもと一緒に参加したりすることもあった。ミサンガを体験した13人のうち10人は最後まで編むことができたが、残り3人はできなかった。

【考察】

草木染めとして「ミサンガ染め」をするという試みは初めてだったが、体験した人全員に楽しんでもらったことから、今後も草木染め体験のイベントプログラムとして活用できると思われる。しかし最後まで編むことができず断念した人もいた。改善点として、今回は糸の長さが均一だったので、参加者の年齢に応じて糸の長さを調節し、編む時間を短縮したり糸同士の絡まりを抑えたりする工夫が必要である。また編み方の種類も一番簡単な三つ編み、やや難しい斜線模様、中高生対象の時は難易度の高い矢羽模様・モザイク模様等の編み方を採用すると、さらに楽しんでもらえるのではないだろうか。ドングリの染料は好評だったため、ドングリが入手しやすい秋季のイベントには適していると考えられる。セイバンモロコシは色の変化が少ないため、小学生低学年以下の人を対象としたイベントには不向きであろう。しかし、外来種であり、農作物への被害も懸念されているため、染料としての利用は有効と考えられる。イベントでは保護者と一緒に参加する子どもも少なくないので、草木染めは保護者と一緒に楽しんでもらえるという点で活用できる。実際、草木染めの色の変化を、子どもだけでなく保護者も楽しそうに見ていたので、草木染めは年齢を問わず、多くの人々に楽しんでもらえるイベントプログラムだといえる。